

図と地からみる阿蘇の草原保全計画

○町田怜子*

1. はじめに

阿蘇くじゅう国立公園の草原景観は、国立公園指定時から火山地形と一体化した景観が評価されてきた。その後、塩田（1967）¹⁾による地形特性や眺望特性からみた景観解析、鈴木（1978）²⁾による別府阿蘇道路のシークエンス景観、両角（1982）³⁾による草原の沿道景観等、計画学に立脚した研究が蓄積されてきた。

1990年代に入り、畜産農家数の減少や地域住民の高齢化等に伴い、野焼きや輪地切等の草原の維持管理の担い手不足が生じ「草原の危機」が深刻化していった。1995年には「阿蘇グリーンストック」という野焼き支援ボランティア団体が設立され、牧野組合のコミュニティによる維持管理に加えて、都市住民等も含めた新しい草原保全活動が展開されるようになった。

筆者らは2000年から20年以上草原景観保全に取り組んでいる。研究の目標像は、従来の地種区分及びそれと一体化した許認可制度による「開発規制」によって景観変化をコントロールしてきた国立公園の景観管理に対し、「管理の滞りにより発生している国立公園の景観管理を地域住民や多様な主体とどのように協働し保全していくか。」という点であった。

本稿では20年間の草原保全のプロジェクトの風景計画の目標像や、景観研究の手法の変遷を概観し、阿蘇の草原保全の研究実践事例から風景計画の理論、読み解きを再考することを目的とする。

2. 保全すべき阿蘇の草原景観の評価（2000～2002）

1990年代以降、阿蘇の草原の危機と草原が持つ多様な価値が議論される中、環境省「国立公園内草原景観維持モデル事業」では広大な草原景観の中でどのように「保全すべき草原景観を評価するのか」が課題であった。

草原景観の保全を推進していくためには、草原を生活の場としている地域住民と、草原に対する愛着心を求心力に活動しているボランティアとの間で、草原再生の目標（草原景観タイプや実施場所）や共通認識を明らかにした上で、多様な主体での協力体制が必要となる。

そこで、景観からみた解決方法として、阿蘇特有の地形特性と地域住民やボランティアが草原保全上重要だと認識している草原景観タイプとの関係性を解析した。まず、阿蘇の草原を地形の特性から分類し、さらに草原景観の起伏の有無や起伏の形状、傾斜度といった細かな地形条件を加味して分類とイメージ調査⁴⁾を行った。続いて、地図指摘法を用いて地域住民や草原ボランティアに「あなたが好きな草原景観」を指摘してもらい、多様な主体が共通認識を持ちやすい草原景観の地形タイプを明らかにした⁵⁾。調査結果は環境省の「景観保全上重要な草原景観」の基礎データの一つとなった。

3. 草原保全・再生の考え方（2003～2011）

2002年に自然再生推進法が施行され、草原・保全再生事業の対象は、維持管理されている草原だけでなく、維持管理が滞った草原や樹林地も対象となった。

表-1 草原保全・再生のプロジェクトと景観研究のアプローチ

年	社会背景/プロジェクト名	計画の目標像	課題解決のための研究	理論・手法
2000 ～ 2002	国立公園内草原景観維持モデル事業 (2000～2001) 自然公園法改正 風景地保護協定創設 (2002) 阿蘇グリーンストック公園団体1号に指定	・保全すべき草原の評価 ・保全すべき草原保全の 目標像の共有	①阿蘇の草原景観の地形タイプ 分類とイメージ ⁴⁾ ②地図指摘法を用いた多様な主 体の景観認識 ⁵⁾	眺望景観、可視・不可視 イメージ調査、テクスチャ 評定尺度法、 地図指摘法 場の景観
2003 ～ 2011	自然再生推進法施行(2002) 阿蘇地域自然再生推進調査計画 (2003～2004) 阿蘇自然再生協議会発足(2005) 眺望確保のための草千里再生事業 (2008～2011) 九州北部豪雨(2011)	・草原保全・再生の考え方 ・草原再生・保全の景観配置	①草原保全・再生すべき草原景 観タイプの分類 ②草原と樹林地の景観配置のあ りかた ⁶⁾ ③草原保全ボランティアの草原再 生に対する認識 ⁷⁾	図と地、シーン景観 視点場と視対象 眺望景観、 視距離 スケッチ描画法、 スカイライン視線入射角、
2012 ～ 2015	阿蘇世界農業遺産に認定(2013) 阿蘇くじゅう国立公園指定80周年(2014) 世界ジオパーク登録(2014) 文化的景観認定に向けた調査(2016)	・複合的な保護制度 ・文化を取り入れた草原学習 ・世界水準の国立公園	①保護者、NPOと協働の草原学 習プログラム開発 ⁸⁾ ②やまなみハイウェイの観光道路 の成立要因 ⁹⁾	文化、土地利用、場の景観、 シークエンス景観、変遷景観 観光ディスティネーション 田村剛・本多静六
2016 ～ 2022	熊本地震(2016) 阿蘇山噴火(2016, 2021) 国立公園満喫プロジェクト(2016～) 第5次環境基本計画 地域循環共生圏 (2018)	・眺めと草原・減災との関わり ・自然災害からの復興 ・阿蘇らしい草原+防災学習 ・グリーンインフラと草原	①阿蘇の草原保全ボランティアと 災害復旧・復興 ¹⁰⁾ ②地域伝承を活かした阿蘇の防 災学習 ¹¹⁾ ③眺めからみる阿蘇の草原と人との つながり ¹²⁾	眺めと生活防災 眺望景観(マ)、 圍繞景観(ミクロ)、 見られ頻度、俯角、仰角、 地域伝承、

*東京農工大学地域環境科学部地域創成科学科

そのため、環境省自然再生推進調査計画では「阿蘇らしい草原の保全・再生のあり方」が計画目標となった。景観研究からは、阿蘇地域特有の草原景観を地とした時に、違和感を与える樹林地や藪化した草原の特性を明らかにするため、スケッチ描画法により、草原保全・再生に向けた草原と樹林地の景観的扱いを考察した⁶⁾。

その結果、浸食谷に分布する樹林地等は、草原景観の中でも違和感が少ないが、カルデラ壁上部緩斜面の広大で起伏に富んだ草原、スカイラインを形成する草原、尾根上の凸部及び緩斜面の草原、滑らかな山腹や山麓緩斜面の草原、そして、主要な展望台からの眺望の対象となる草原景観は樹林地や藪化した草原は、ボランティアも草原再生の意向を持っていることが確認できた⁷⁾。

4. 阿蘇の複合的な景観保全と草原学習 (2012~2015)

阿蘇地域は2014年には「阿蘇の草原の維持と持続的農業」として世界農業遺産に認定され、同年に世界ジオパーク登録、2018年には重要文化的景観の認定等、草原と火山、人とが共生する景観価値とその保護制度が複合的な枠組みとなっていった。

一方で世界農業遺産等の保護制度に認定された景観を維持・保全するためには持続的な人の営みが必要不可欠となる。したがって、草原の景観的価値を保全するためには、地域住民や多様な主体と草原の価値を共有し、その活動論を支えるマネジメントも重要になってくる。

そこで、筆者らは保護者、学校や環境省、NPOらと協働で地域文化からみた草原学習プログラム開発を試行した。その結果、児童らが草原学習で学ぶ姿が地域コミュニティのコンセンサス形成に寄与することが示唆された⁸⁾。

また、阿蘇くじゅう国立公園80周年(2014)を迎え、九州横断道路が国立公園計画の基での構想・計画経緯を明らかにし、草原保全と観光の両面からみた地域振興の方策のあり方を考察した⁹⁾。

5. 自然災害からの復興・眺めからみる草原と人とのつながり (2012~2022)

阿蘇地域では2012年の九州北部豪雨、2015年ならびに2016年の阿蘇山噴火等、2016年に発生した熊本地震や2012年の九州北部豪雨、2015年ならびに2016年の阿蘇山噴火等、多様な自然災害が発生し、人命も失われた。

東日本大震災以降、災害伝承と地域への態度、防災意識の向上に寄与することは報告されている。そこで、研究の目標は、阿蘇地域の災害復興の手がかりとして、自然気象・災害伝承という過去の事象¹⁰⁾を、「眺め」とい

う行動により世代を超えて地域住民が共有しやすい地域防災へと展開することを設定した。

研究方法は、阿蘇地域の自然気象を、阿蘇山を遠くから眺めるといった実際に人の眺める景観すなわち「眺望景観」のメソレベルと人間の身の回りの景観すなわち「囲繞景観」のミクロレベルから分類した。その結果、阿蘇地域の人々は、阿蘇山の眺望の変化から雨、降灰等の予兆を読み解いていたことを確認できた¹¹⁾。

以上20年間の阿蘇の草原景観保全を振り返ると、社会変化に伴い計画の目標像も異なってきた。しかし、どの時代も火山地形と一体化した草原景観が国立公園の地として保全されるために、草原景観の目標像を幅広い人と共有できることを目指してきた。今後も景観から草原保全のインセンティブを創出する理論を構築したい。

補注及び引用文献

- 1) 塩田敏志 (1967) :阿蘇の景観分析, 観光 59.
- 2) 鈴木忠義 (1966) :観光道路の研究 別冊阿蘇登山道路の利用実態と道路工学的研究, 鈴木忠義所蔵
- 3) 両角光男他 (1997) :沿道における草地景観特性分析その2:阿蘇地域における草地景観保全に関する研究, 日本建築学会大会学術講演梗概集 (関東) 7-8.
- 4) 猪瀬怜子・麻生恵他 (2002) :阿蘇地域における草原景観の分類とその景観イメージに関する研究, ラ研究65(5)621-62.
- 5) 猪瀬怜子・麻生恵他 (2004) :地図指摘法を用いた阿蘇の草原景観に対する地元住民の認識に関する研究, レジャー・レクリエーション研究 52, 1-9.
- 6) 町田怜子, 下嶋聖, 麻生恵他 (2013) :阿蘇地域の地形特性からみた草原と樹林地の景観的扱いに関する事例研究, ラ研究, 76(5)723-726.
- 7) 町田怜子・下嶋聖・麻生恵他 (2014) :阿蘇地域におけるボランティアの草原再生に対する景観認識に関する研究, ラ研 77(5)655-658 .
- 8) 町田怜子・大津愛梨他 (2015) :南阿蘇地域における小学校と保護者, 大学が連携し「地域の暮らし」に着目した草原学習プログラム開発に関する研究, 日本野外教育学会口頭発表
- 9) 町田怜子・保田真紀・水内佑輔 田中伸彦 (2016) :観光実業家・油屋熊八の人物史からみる阿蘇くじゅう国立公園観光道路の成立過程, ラ研究79(5).489-494
- 10) Reiko MACHIDA(2021): THE KUMAMOTO EARTHQUAKE'S CREATIVE RECONSTRUCTION EFFORT LED BY A DIVERSE RANGE OF ORGANIZATIONS, International Journal of GEOMATE 21(81)86-92.
- 11) 町田怜子・下嶋聖他 (2019) :阿蘇地域における自然と人との関わり・伝承を取り入れた熊本地震後の防災教育プログラム開発, ラ研究 82(5)521-526.
- 12) サルバドールノア・町田怜子・下嶋聖・入江章昭・本田尚正 (2022) :熊本県阿蘇地域における景観からみた自然気象・災害伝承の特性, 関東森林研究 73, 29-32.